

ヤンデレ王子を闇落ちから救ったら
愛執まみれの独占欲に囚われました

目次

ヤンデレ王子を闇落ちから救ったら
愛執まみれの独占欲に囚われました

番外編 結婚準備

ヤンデレ王子を闇落ちから救ったら
愛執まみれの独占欲に囚われました

プロローグ

森の中の小さな家。その一室に、裸の女がいた。

緩やかな癖のあるダスティローズの髪に、なめらかな白い肌。鎖骨の下には特徴的な文様の痣が浮かんでいる。

ベッドの上で裸体を晒す女の瞳は深い霧に包まれたように曇り、その奥に意思は見えなかった。

彼女の痴態を眺める男が、くつくつと喉を鳴らす。

「ツイーラ、足を広げて。僕にもっとよく見せて？」

彼女の脚を掴んで開くこともできたが、ナハルドはあえてそう命令した。

今の彼女にとって、ナハルドの言葉は絶対である。

自ら足を開いて秘部を見せろという命令に、ツイーラは顔を赤くして恥じらいを見せた。心を男によつて塗りつぶされてなお、羞恥は残っているらしい。

けれどもナハルドに逆らうようなことはせず、ゆつくりと足を左右に広げていく。

「こ、これでいい？」

遠慮がちに足を開いたツイーラは、許しを乞うように問うた。

「それじゃあよく見えないよ。膝を折り曲げて、もっと大きく足を開いて」

「っ……！」

あえて意地悪く言ってみても、彼女はナハルドを責めたりはしない。

恥ずかしそうに震えながらも、膝を折り曲げて足を大きく左右に開き、隠された女性の部分をナハルドの眼前に曝け出す。

「……綺麗だ」

ナハルドは無意識に感想を口にする。

彼女の髪と同じ色をした陰毛の下にある、小さな割れ目。そこは、ナハルドの愛撫を受けて潤んでいる。

「触るよ」

熟れた果実に貪りつきたくなる衝動に耐えながら、ナハルドは彼女の割れ目に指を這わせた。

くちゅうりと小さく音がして、ぬるりとした液体が絡みつく。ツイーラが自分の愛撫で感じてくれていることに喜びが湧き上がる。

「あつ、ふう、ああ……」

ナハルドが動くたびに、ツイーラは艶めいた喘ぎ声を漏らす。

闇の精霊の力で支配された今の彼女は、ナハルドが何をしたって拒絶しない。

ああ、やっと、彼女が手に入った。それでも、彼女がナハルドから離れていくことはない。

仄暗い目をしたナハルドの口元には、いびつな笑みが浮かんでいた。

一章 精霊の祝福とナハルド王子

屋敷は血の匂いで満ちていた。

美しい模様が織り込まれた青い絨毯に、赤色のシミが広がっていく。

殺されたのは屋敷の使用人だった。ツイーラをいない者として扱う夫に代わって、よく話し相手になってくれた優しい女性だ。先日、そろそろ孫が生まれるのだと嬉しそうに話していた。

その彼女が死んだ。ツイーラの目の前で、心臓を剣でひと突きされて。

窓の外では季節外れの霧雨が降り続けている。息苦しいほどの湿気と緊張で汗が止まらない。強く脈打つ鼓動を感じながら、相手の一挙一動を見逃すまいと、ツイーラは固唾を呑んで目を凝らした。

「……どうして」

どうにか紡いだ言葉は震えていた。彼女の紫紺の目は恐怖に染まり、かるく癖のついたダスティローズの髪も輝きを失っているようだ。

怯えるツイーラを前にして、血の滴る剣を握る男はいつも通り平然としている。

彼の名前はナハルド・フィーネン。精霊王国フィーラシアの第二王子であり、数カ月前に挙式したばかりのツイーラの夫である。

美しい男だった。月の光を編み込んだような柔らかな白金の髪に、高く通った鼻梁。端正な顔立ち、まるで精巧に彫り上げられた彫像のようだ。しかし、どこか気だるげな白群の瞳は何の感情も映さず、どろりと濁っているようにも見える。

「君を庇おうとして、邪魔だったから」

冷たく床に横たわる死体を一瞥して、まるで花瓶を片づけたような口調でナハルドが告げる。彼は剣についた血を一振りして払うと、その切っ先をツイーラに向けた。

この美しい夫のことが、ツイーラはずっと苦手だった。

初対面から微笑むことなく、妻であるツイーラのことまで路傍の石と同じように見る。初夜に部屋に來なかつただけでなく、結婚してからろくに会話もしたことがなかった。

それでも、こうして剣を向けられるほど恨まれていたとは思わなかったのだが。

「殺したいほど、私が嫌いなのですか？」

「べつに。君のことは好きでも嫌いでもないよ。だけど、君がいればルミエナと結婚できない」

「ルミエナ様と？ 馬鹿を言わないでください。ルミエナ様は王太子妃ですよ！」

ナハルドの虚無の瞳が、ルミエナを見た瞬間だけ光を宿すことにツイーラは気づいていた。

けれどルミエナは王太子妃。彼の兄であるライツェルトとすでに結婚しているのだ。

「知っているよ。精霊に祝福されたルミエナは、王太子妃にこそ相応しい——そう評されて、ライツェルト殿下と式を挙げるところを僕も見ただからね」

ナハルドはライツェルトのことを兄とは呼ばない。

同腹の兄弟であるにもかかわらず、ふたりの間には幼い頃から確執があるのだと噂で聞いたことがある。

「だったらどうして！ 私を殺したところで、ルミエナ様は手に入りません」

「ライツェルト殿下はもうすぐ消える」

ナハルドの声には確信が込められていた。だが、ライツェルトが不調だという話は聞いたことがない。つい先日、精力的に政務をしている姿を見かけたばかりだ。

「殿下はご病氣なのですか？」

そんなはずないと思いつつも確認すると、ナハルドはゆっくり首を左右に振った。

「殿下の統治に不満を持つ人間もいるんだよ」

ずっと動かなかったナハルドの唇が、軽く弧を描く。

恐怖を感じる笑みを見て、ツイーラの背筋が凍った。

「まさか、殿下の暗殺を？」

「さあね。これから死んでしまう君には関係ないことだよ」

おしやべりは終わりだと言わんばかりに、ナハルドは剣を構え直す。

ツイーラはその刃から逃れるすべを持たなかった。

逃げようにも、部屋の入り口はナハルドの後ろにあるのだ。悲鳴を聞きつけて助けに来た使用人は、たつた今殺されてしまった。

「……ナハルド様は正気を失っておられます！」

こんなことをして、何になるというのだ。

ナハルドの企てが明るみに出れば、王位になどつけるはずがない。

妻と兄を殺してまでルミエナを得ようとするなんて、常軌を逸している。

「そうだね。僕は闇の精霊に祝福された王子だから」

苦し紛れの罵りも、ナハルドの心を動かすことはできなかったようだ。

ナハルドの腕が動く。刃が宙を踊ったかと思うと、凄まじい衝撃とともに視界が暗転した。

身体から力が抜けて、ドサリと床に倒れ込む。

赤い命が流れ出て、どんどんと全身が冷えていった。

「これで邪魔者はいなくなつた。やつと、ルミエナを迎えに行ける」

薄れゆく意識の中で、恍惚とするナハルドの声が聞こえた気がした。

ガバリとベッドから飛び起きて、ツイーラは肩で息をした。

寝汗で夜着が肌で貼り付き、心臓が早鐘を打っている。思わず腹部を手で探り、何の傷もないことを確認してホッと息を吐き出した。

（すごく怖い夢だった。本当に死んだかと思った……）

とても生々しい夢であったが、現実であるはずがない。

なぜなら、ツイーラはまだ八歳なのだ。結婚などしてないし、ナハルドとも会ったことがない。だけど、ただの夢だとも思えなかった。

夢の中のツイーラは二十一歳だったが、その年齢まで生きてきた記憶をきちんと有していたのだ。どうやって成長して、ナハルドと婚約を結び、結婚に至ったか。細かな部分まで覚えているなんて、こんな夢は初めてだ。まるで二十一歳まで生きて、死んで時が戻ったかのような気分だった。

奇妙な夢について考えていると、胸元がチクリと小さく痛んだ。

見下ろすと、鎖骨のずつと下に小さな痣が浮かんでいる。昨日まではなかったものだ。

「精霊の祝福！」

ツイーラは叫んで、慌ててベッドから飛び下りた。廊下へ飛び出すと、ひんやりとした朝の空気が肌を撫でる。窓の外はまだ暗く、東の空には淡い光が滲んでいた。

起床するには早い時間だったが、ツイーラは構わずに廊下を走って母の寝室へと向かった。

「お母様聞いて、大変よ！」

乱暴に寝室の扉を開ける。ツイーラの母であるアマーリエはまだ眠っていたのだろう、むくりとベッドから起き上がり眉根を寄せた。

「ツイーラ、朝から騒々しいわよ」

「ごめんなさい。でも大事件、精霊の祝福をさずかったんだから」

アマーリエは、ツイーラの言葉を聞いて目を丸くした。

「まあ、ツイーラ。それは本当なの!?」

「本当よ！ ほら、祝痣が出たの」

ツイーラは興奮した顔で夜着をずらし、胸元の痣をアマーリエに見せた。

美しい模様を描く痣は、ひと目見て特別なものと分かる。これは祝痣と呼ばれる、精霊の祝福を受けた者だけが授けられる痣なのだ。

「すごいじゃないの、おめでとう！」

アマーリエに祝われて、ツイーラはへらりと相手を崩した。

精霊王国フィーラシアは、初代の精霊王が始まりの精霊と契約を結んできた国だ。以来、精霊王とその仲間の子孫には何らかの精霊の加護が与えられている。

とはいえ、加護といっても大したことはできない。火の精霊の加護を受けた者は火傷しにくくなるといったような、些細な恩恵を受けるだけである。フィーラシアの貴族であれば何かしらの精霊の加護を受けているが、恩恵がささやかすぎて、自分がどの精霊の加護を受けているか分からないことがほとんどだった。

しかしときおり、精霊に特別に気に入られる者がいる。精霊に祝福された証として、身体どこかに祝痣が浮かび上がるのだ。そして、通常の恩恵とは比べものにならない特別な力が使えるようになる。

アマーリエは急いで書棚から本を取り出した。

祝痣は授ける精霊によって模様が異なる。ツイーラがどの精霊に祝福されたのか調べるつもりなのだろう。ツイーラも気になって、アマーリエの横から本を覗き込んだ。

本には様々な模様と精霊の名前が書かれていた。ツイーラも知っている有名なものから、名前も知らないものまでずらりと並んでいる。

自由に炎を操れる焔の精霊、音楽の才を発揮する音の精霊、人の心を覗き見る鏡の精霊なんてものもある。

「あ、お母様これよ！ この模様！」

祝禊と同じ模様を見つけて、ツィーラは慌てて指さした。

期待に満ちた顔をしたアマーリエは、精霊の名前を読んだ直後その表情を曇らせる。

「……時の精霊」

「それってよくない精霊さまなの？」

張りつめたアマーリエの声を聞いて、ツィーラは不安になった。祝福はめでたいことのはずなのに、彼女は嬉しくなさそうだ。

アマーリエはゆつくりと首を左右に振る。

「そんなことないわ、立派な精霊様よ。ただ、時の精霊様のお力は強くて、場合によっては混乱を招くことがあるの」

「時の精霊さまは、どんな力を授けてくださるの？」

「未来視の力よ。時の精霊様は未来を視ることができるの」

「未来を見る力……」

ツィーラは今朝見た夢を思い出して、胸の奥がざわつくような感覚に襲われた。

「今日、すごく変な夢を見たの。もしかして、それが未来視なのかな」

「どんな夢だったの？」

「……大人になった私が、殺される夢」

ツィーラは今朝見た夢の内容を話した。ナハルド殿下と結婚すること。けれど、殿下は兄嫁であるルミエナを愛していたこと。彼女を得るために、邪魔になったツィーラを殺してしまうこと。

いつもなら内容なんてすぐに忘れてしまうが、今日の夢は細部まではつきりと思い出せる。

「そう。それはとても怖い夢だったわね」

「あれが未来視だったらどうしよう。私、ナハルド殿下に殺されてしまうの？」

「ナハルド殿下に……？ 大丈夫よ。時の精霊の見せる未来は、可能性のひとつに過ぎないの」

アマーリエはツィーラを慰めるように抱きしめて、優しく頭を撫でながらある話を聞かせてくれた。

フィーラシアでは代々、精霊に祝福された者を王妃に迎える慣習がある。その中のひとりに、時の精霊の祝福を受けた王妃がいた。彼女の力である未来視によってこの先の出来事が分かれば政治も安定するだろうと、彼女はたいへん期待されたらしい。

しかし、王妃が視た未来は外れた。隣国で内乱が起きると予見し、それを見越して準備をしていた国王は困ってしまったらしい。結局、嘘の報告をして国を混乱させたとして、その王妃は捕らえられたのだ。

のちに、時の精霊の未来視は絶対ではなく、幾重にも枝分かれした未来の可能性のひとつを見せるだけに過ぎないのだと判明して、彼女は釈放された。

「未来は人の手で変えられる。だから、時の精霊様は警告をくれるだけなのよ」

時の精霊が見せる未来は、悪い内容が多いらしい。そうならないように努力しろという警告なのだろうというのが、アマーリエの言葉だった。

「時の精霊様の力は、悪いものではない？」

「もちろんよ。だけど、未来が見えるという力は人の欲望を呼び起こすわ。罪人にされた王妃様のように、その力を利用されないと限らない。……今は、精霊に祝福された少女が現れていないから、特にね」

精霊に祝福された少女——それが未来の王妃候補を指すことに、ツイーラも気づいた。祝福を受けたことで、ツイーラも王妃になる資格を得てしまったのだ。

「王妃様になったら、私も罪人にされてしまう？」

「王太子であるライツェルト殿下は賢明な方だそうなので、そんなことにはならないでしょうけど。でも、ツイーラの祝福は公にしない方がいいかもしれないわ。うちは伯爵家だからなおさら、ね」ツイーラの生家であるオラクルフ伯爵家では、王妃になるには少し格が足りない。

他に祝福された者が現れなければ候補にあげられるだろうが、ツイーラは今朝見た夢でルミエナが王太子妃となることを知っていた。

夢の内容が正しければ、ルミエナ・グラウフェンは侯爵家の出身だ。黎明の精霊に祝福された美しい女性で、ツイーラよりよほど王妃に相応しい。

「祝福のことは、誰にも話さないほうがいい？」

「お父様とも相談しなければいけないけれど、そうした方がいいと思うわ。ツイーラは秘密にでき

る？」

優しく問いかけられて、ツイーラはこくりと頷いた。

祝意を自慢したい気持ちもあるけれど、時の精霊の力はまだ未知数で少し怖い。どんな未来を視たのかと聞かれて、ナハルド殿下に殺されたなんて言えば、不敬だと罰せられるかもしれない。

「ツイーラはいい子ね。さあ、せっかく早起きしたのだから、ドレスの準備をしておきなさい。今日は王城に行く日よ」

ツイーラはパツと顔を明るくした。王城のパーティに行くのは初めてだ。

兄から王城には美味しいお菓子があると散々聞かされていたので、楽しみにしていたのだ。

「嬉しい！ あ、でも……ナハルド殿下もいらつしやるのよね」

今朝の夢を見たあとで、ナハルドに会うのは少し怖い。

「ツイーラ、未来はいくらでも変えられるわ。今のナハルド殿下に何かされたわけではないのでしょう？ 先人観で人を見てはだめよ」

「……うん、そっか。そうだよね」

もしいつかナハルドに殺されるのだとしても、それはずっと未来の話だ。

それに、ナハルドがツイーラを殺したのは、彼と結婚したからである。ルミエナと結ばれるために妻であるツイーラが邪魔だったからだ。

ナハルドもツイーラ自身を恨んでいたわけではなさそうだし、彼と結婚しなければ同じ未来になることはない。

未来は変えられるのだ。ツイーラは安心して、パーティの準備をすることにした。

穏やかな陽光が降り注ぐ王城の庭園は、軽やかな笑い声で満たされていた。色とりどりの花が咲き誇る中に、白いテーブルクロスをかけた円卓がいくつか並べられ、そこに置かれた皿の上には小さな焼き菓子が美しく飾られている。

七歳から十二歳までの子供を対象とした、ガーデンパーティである。それぞれの母親たちが社交をする中、まだ幼い子供たちは自由に庭を駆け回っていた。

毎年行われるパーティであるが、ツイーラは昨年熱を出してしまい参加できなかったのだ。

ツイーラにとっては、これが初めての社交の場である。

アマリーエが張り切って用意してくれた海の色のドレスはお気に入りだが、華やかなドレスに身を包んだ愛らしい少女たちを見ると、もっと明るい色の方がよかったのではないかと、そわそわしてしまふ。

アマリーエは何人かの貴族に挨拶をすると、大人たちの社交の場へと向かってしまった。

子供は子供同士で固まり、友人を作らなければならない。けれども、ツイーラはどうすればいいか分からず戸惑った。

(兄様がいてくれればよかったのに)

ツイーラの兄は今年で十三歳。この会への参加資格を失ってしまったので、今日は留守番をしている。彼がいれば知り合いを紹介してくれただろうが、残念ながらツイーラはひとりだ。

同じ年頃の女の子たちはみんな、庭の中央に集まって輪を作っている。その中心にいるのは見事なブロンドの髪をした美しい少年だった。刺繍の施された上品なジャケットに身を包み、周囲に笑顔振りまく少年は他の子供たちと違って見える。

彼こそ精霊王国ファイーラシアの第一王子、王太子のライツェルト・フィーネンだ。パーティに着いて早々、真つ先に挨拶をしたから顔と名前は覚えている。

会うのが心配だったナハルドは見当たらなかった。挨拶を求められなかったということは、きっとこの場にいないのだろう。だからライツェルトに人気が集まっているというわけだ。

ツイーラも他の少女に倣ってあの輪に入るべきだろうか。

しかし、ナハルドの兄であるライツェルトに必要以上に近づきたいと思えない。

ならば兄に自慢されたお菓子を食べようとしたものの、周囲を見回してもそんな子は見当たらない。マナー違反が怖くて、ひとりで菓子を食べに行く勇氣はなかった。

(パーティ、楽しみにしていたけど……なんか、疲れちゃうな)

所在なざげにポツリとしているのも、友達を作れない子として浮いてしまうかもしれない。

目立つのが嫌で、ツイーラは自然と人が少ない方へと移動した。柔らかなピンクの花々は春風に揺れ、まるで微笑んでいるようだ。これが見られただけでも参加してよかったと思えるほどだった。遠くに小さな池と東屋を見つけた。会場からはかなり外れてしまふが、たしか今日は王城の庭であればどこを見て回ってもよかったはずだ。せっかくなのだから探検してみようと、ツイーラはそちらへ足に向けた。

池の水面がキラキラと輝き、美しい青い羽の蝶がひらりと東屋^{あずまや}へ向かう。追いかけるようにしてツイーラも東屋^{あずまや}に入ると、ベンチに見慣れぬ少年が座っていて驚いた。

美しい少年だった。濃紺のジャケットを着ていなければ女の子と間違えただろう。小柄で線が細く、どこか儂い^{はかま}雰囲気がある。けれど、彼の一番の特徴はその髪色だ。闇を溶かしたような真っ黒な髪は、フィーラシアでは珍しい。

「……誰？」

驚いたように少年が顔を上げる。冬の泉のような淡い水色の瞳と視線がぶつかって、ツイーラはドキリとした。

彼の瞳は、今朝夢の中で見たナハルドとよく似ていたのだ。

（本人……なわけないよね。髪の色が違うし）

ナハルドの髪は月の光を編み込んだような、柔らかな淡い金髪だ。彼のような漆黒ではない。

「ごめんなさい。パーティに来ていたのだけど、東屋^{あずまや}が気になってしまつて」

「そう。じゃあどうぞ。僕はもう行くから」

少年はすぐさま視線を逸らすと、ツイーラに席を譲りどこかに立ち去ろうとする。

「あ、待つて！」

思わず呼び止めると、少年が足を止めてゆっくり振り返った。

「何？」

「えっと、あなたが先にいたのに、追い出すのは悪いわ。ここで何かしていたんじゃないの？」

「べつに。人が多いと疲れるから、逃げていただけ」

「じゃあ私と一緒に。せっかくだし、話し相手になつてくれない？　せっかくパーティに来たのに、

友達ひとりも作れそうになくて」

ツイーラが提案すると、彼は目を丸くした。

「話し相手つて……僕でいいの？」

「え？」

「向こうにライツェルト殿下がいる。そっちに行つた方がいいよ。僕は……こんな髪だし」

彼は自分の真っ黒な髪をつまんで、嫌そうに顔を顰^{しか}めた。

もしかして、彼は自分の髪が嫌いなのだろうか。

「ライツェルト殿下の周りには、もう人がいっぱいいたわ。あの中に入るのは疲れそうなもの。それに、髪がどうかしたの？　綺麗な黒髪じゃない」

「綺麗？」

「ええ。夜の空みたいで素敵な色だと思うけど……」

ツイーラが言うと、少年は戸惑った表情をした。

「そんなの、初めて言われた。……黒は闇の精霊の色だから、気持ち悪いって」

「誰にそんなひどいことを言われたの？」

「面と向かつてではないけど、みんな、陰で言つてる」

白群^{ちやへんぐん}の瞳が寂しそうに陰るのを見て、ツイーラは胸が苦しくなった。

どうしてこの瞳をナハルドと似ているなんて思ったのだろう。ナハルドの瞳はそれこそ闇の淵を覗き込むような深い虚無をたたえていたが、彼の瞳はきちんと感情を宿している。

「私はそんなこと思わないわ。パーティに退屈していたの。嫌じゃなかったら付き合ってた？」もう一度誘うと、黒髪の少年は少しだけ躊躇^{ためら}ったあと、ツイーラの正面に座り直した。

人見知りなのだろう、彼の視線はそわそわと宙をさまよって落ち着かない様子だ。

「王城の庭はとても綺麗ね。さつき、青い羽の蝶がいたの。珍しい模様で素敵だった」

「……たぶん、アズルフィアかな」

「知ってるの？」

「羽に黒い斑点があつたなら、だけど。鱗粉に発光作用があつて、夜になると光るんだ」

「斑点もあつた気がするわ。夜に光るなんて素敵ね！」

「他にもゼリアスって蝶もいるよ。青紫っぽい色だったら、こっち」

「深い青だったから、そっじゃないと思う。あなた、物知りなのね」

ツイーラが感心すると、少年は照れたように髪の手端を指で弄^もった。

「図鑑を見るの、好きなんだ。虫とか、あと、植物も」

「それじゃあ、あのピンクの花はなんて名前か知ってる？」

「ええと、あの花はローゼリアだね。その横の黄色のはセルリス」

少年は庭園の植物に詳しくて、庭に咲く花の名前を次々に教えてくれた。ツイーラも楽しくなつて、色々と尋ねてしまった。

しばらく花や虫の話で談笑してから、ツイーラは彼に微笑みかける。

「ありがとう。慣れないパーティで緊張していたのだけど、おかげで楽しかったわ」

「う、ううん。……僕の方こそ、楽しかった」

もじもじしながら頬を赤らめてお礼を告げる様子は、なんだかいじらしくて微笑ましい。

「君はこのパーティ、初めてなの？」

「そうなの。去年は熱を出してしまつて参加できなくて。お母様に友達を作りなさいって言われていたんだけど、女の子はみんなライツェルト殿下に夢中で話しかけづらくって、どうしようかつて思ってた」

パーティに参加したのに誰とも話せなかつたら、さすがに怒られてしまうかもしれない。彼と交流できてよかった。

「ライツェルト殿下には興味ない？」

「うーん。どちらかといえば、あまり近づきたくないかも」

ツイーラの祝福が露見すれば、ライツェルト殿下の婚約者にされてしまうかもしれない。

そうなれば周囲の嫉妬を買うだろうし、仮に婚約者になつても、やがてルミエナに祝福が現れればその立場を追われることになるだろう。

それに、ライツェルトと仲良くなれば、自然とナハルドとも顔を合わせることになりそうだ。

「変わってるね。女の子はみんな、ライツェルト殿下みたいな人が好きかと思つてた」

「人の好みはそれぞれじゃないかな。私はあなたの方が話しやすそう」

「ほ、本当に……？」

「うん。あ、でも、べつにライツェルト殿下が嫌だつてわけじゃないよ」

不敬だと思われてはいけなさと、ツイーラは慌ててつけ足した。

少年も分かっているというように頷く。

「……殿下が嫌いだなんて人はいないと思う。格好いいし、優秀だし」

何だか、やけにライツェルトを気にしているようだ。どうしてなのかと不思議に思ったが、同年代の少年ならば彼を意識するのは当然かと考え直す。

なにせライツェルトは悪い噂を聞かない。容姿端麗、勉学も優秀らしく、次期国王として周囲から期待されている。同性であれば嫉妬心が芽生えるのも自然だろう。

「でも、あなただって素敵だと思うよ？　すごく綺麗な顔をしてるし、物知りですごいなって思ったもの」

ライツェルトと比べて落ち込んでいる様子だったので、ツイーラはそう言つて彼を励ました。

「あ、ありがとう。……僕、その、こんな髪だし、友達とかいなくて。婚約者を作れつて言われているんだけど、そんなの絶対に無理で……」

婚約者という言葉聞いて、ツイーラはピンと閃いた。

そうだ。先に婚約者を作っておけば、ナハルドとの結婚を避けられるのではないだろうか。

そうすれば、自然とツイーラが殺される未来も回避できる。

「それなら、もしよかったらだけど、私を婚約者にしてみない？　私もまだ相手が見つからな

くて

「えっ？」

「あ、でも身分とか釣り合わないかな？　うちは伯爵家なんだけど」

「……う、うん。僕は色々事情があるから、伯爵家と婚約しても問題ないと思う」

少年の言葉を聞いて、ツイーラはおやつと思った。こういう言い方をするということは、彼の身分はおそらくかなり高いのだろう。

しまった。婚約だなんだと言いつつ前に、先に名前と家名を聞いておくべきだった。

「あの、今さらだけど名乗らせてね。私は――」

「ツイーラ、どこにいるの？」

名乗ろうとした瞬間、アマーリエがツイーラを探す声が聞こえてきた。

「お母様だ！」

もうお開きの時間なのだろうか。ツイーラは慌てて立ち上がり母を呼んだ。

ツイーラに気づいたアマーリエが、東屋へと歩いてくる。

「まったくもう、どこにいるのかと思ったわ。……あら？」

ツイーラと一緒にいる少年に気づいたアマーリエは、驚いた顔をしてから、少年とツイーラを見比べた。

「……驚いたわ。ツイーラ、ナハルド殿下と一緒にいたの？」

「えっ!？」

驚いたのはツイーラの方だ。この少年がナハルド殿下？

「う、嘘、だって、殿下は金髪じゃあ……」

「……気づいていなかったのね」

呆れた声でため息を吐くアマーリエを見て、ツイーラは焦った。

アマーリエがこんな嘘をつくはずがないので、この少年が本当にナハルドなのだ。たしかによく見ると瞳の色は同じだし、顔立ちに面影もなくはない。

「ナ、ナハルド殿下……なの？」

恐る恐る当人に確認すると、彼はくりと頷いた。

「……うん。僕はナハルド・フィーネンだけど」

「でも、だって、ナハルド殿下は金髪のはずよ」

「よく知ってるね。僕、もともとは金髪だったんだ。でも、闇の精霊に祝福されてからこんな色になっちゃった」

ナハルドの言葉にツイーラは驚いた。精霊の祝福で髪の色が変わるなんてことがあるのだろうか。しかし、未来のナハルドは金髪に戻っていた。いったいどういうことかと尋ねたかったが、未来視のことを話すわけにもいかない。

「ツイーラ。しっかりと殿下に挨拶なさい」

娘の戸惑いに気づいたアマーリエが、場の空気を替えるように挨拶を促す。

ツイーラはハツとして、慌ててスカートの裾を摘まんだ。

「ツイーラ・オラクルフです。殿下、本日はお付き合いいただき、ありがとうございます」

「ううん、僕も君と喋れて楽しかった。ツイーラ、よかったら僕とまた遊んでくれる？」

「も、もちろんです」

これだけ親しく話をして、今さら嫌だと言えるはずがない。ツイーラは声が裏返らないよう注意しながら、引きつった笑みを浮かべたのだった。

「どうしてナハルド殿下がいるって教えてくれなかったの!？」

帰りの馬車の中でツイーラが叫ぶと、アマーリエは困った顔をした。

「私も殿下はいらっしゃらないと思っていたのよ。お姿が見えなかったし、あまり表舞台には出てこない方だから、今日も欠席されていたのかと」

アマーリエもナハルドが来ていたことは知らなかったらしい。

彼は隠れるように東屋にいたので、挨拶ができなかったのだらう。

「でも、殿下が黒髪だって教えてくれていたらよかったのに」

髪の色が違うのだと知ってさえいれば、誤解することなんてなかったはずだ。

「ツイーラが知らないと思わなかったのよ。未来を視たのでしょうか？」

「未来ではナハルド殿下は金髪だったの!」

ツイーラは不服だったが、アマーリエが教えてくれなかったのも仕方がない。彼女からすれば、それこそ未来視で本人を見ているツイーラがナハルドの髪色を誤解しているとは思わなかったのだ

ろう。

「では、未来の殿下は闇の精霊のお力を制御されていたのね」

ナハルドはもともと金髪で、祝福によって髪の色が変わったのだと言っていた。つまり、力を制御できれば元の髪色に戻るのかもしれない。

しかしそんなことを、あのとときのツイーラに気づけるはずがなかった。

髪色が違うのだから別人なのだと思い込んで、すっかり気を許してしまったのだ。

「どうしよう、お母様。私、ナハルド殿下に婚約を申し込んだじゃった」

ツイーラが青ざめると、アマリーエは頭が痛いと思わぬ額を押さえた。

「……あなた、ナハルド殿下を避けたいのではなかったの？」

「避けたかったの！ だから、さっさと別の人と婚約しちゃおうと思ったのよ」

まさか、ナハルドが黒髪になっているだなんて思わないではないか。

ツイーラは彼の成長した顔しか知らないのだ。髪の色が違うのだから、別人だと考えるに決まっている。

「だからといって、名前も聞かずにそんな話をするだなんて愚かすぎるわ」

アマリーエの言葉はもっともすぎて、ツイーラは何も言えなくなった。

婚約だなんて大事なことを、その場の勢いで話すべきではなかったのだ。

「どうしよう……私、夢と同じようにナハルド殿下と結婚しちゃうの？」

「婚約は家と家の結びつきですもの。子供同士の口約束で実現することはないでしょうけど……ナ

ハルド殿下の場合は分らないわね」

王族の嫁になるには、オラクルフ家は少々格不足だ。伯爵家でも力がある家であればいいが、オラクルフ家は大した収入のない小さな領地を持つだけの中流貴族。普通ならば婚約者候補には挙がらない。

しかし、相手がナハルドとなれば話が別だ。彼は闇の精霊の祝福を受けている。それは一種の呪いのようなもので、闇の精霊に関わるなんてと繋がりを持つことを嫌がる者が多いらしい。ゆえに、ツイーラのような身分の者でも婚約を認められる可能性がある。

だからこそ、未来視の中でもツイーラが彼の婚約者として選ばれたのだろう。

「本当に申し込みが来てしまったらどうしよう」

「王家からの申し出なんて、よほどの理由がないと断れないわよ？」

「うっ、わ、分かっている……」

「貴女の祝福を明かせば別でしょうけど……ライツェルト殿下の婚約者になる気はある？」

現状、貴族令嬢で精霊からの祝福を得ているのはツイーラだけだ。公表すれば、おそらくナハルドではなくライツェルトとの婚約話が持ち上がるだろう。

しかし、ツイーラはゆっくりと首を左右に振った。

「ライツェルト殿下は、ルミエナ様と結婚するはずよ。ふたりのお邪魔虫になるのは嫌だし……」
ツイーラの脳裏に、庭園で話をしたナハルドの白群の瞳がよぎった。

未来で見たナハルドと違って、彼の瞳にはきちんと感情が宿っていた。

未来は変えられるというのなら、ああなってしまう前にナハルドをどうにかできないだろうか。ライツェルトの婚約者になればナハルドを避けることはできるが、それだと彼が兄と対立する未来は変わらない。

あの悲劇を避けるためには、ナハルド自身をどうにかしなければいけないのだ。

「夢の通りになるのは嫌だけど……私、ナハルド様とお友達になってみたい」

未来視のことがあつて動揺していたが、別れ際に彼はまた遊びたいと言ってくれたのだ。

正直、未来のナハルドは怖い。だけど、あれはまだ訪れていない未来だ。先入観で見てもダメだとアマリーエも言っていたではないか。

今のナハルドには何もされていないのに、避けるのはおかしい。

「そう、あなたの気持ちは分かったわ」

アマリーエはそっと目を伏せたあと、励ますようにツイーラを見つめた。

「ナハルド殿下は複雑な立場におられるわ。どうか、味方になってあげて」

「……味方に？ 何をすればいいの？」

「難しいことではないわ。あなたの言った通り、お友達になってあげればいいの」

アマリーエの言葉に、ツイーラはこくりと頷いた。

それならば大丈夫だ。もともと、あの物知りな少年ともっと仲良くなりたいとツイーラも思っていたのだから。

二章 闇の精霊の力

パーティーから数日後、ナハルドとの婚約に関して両親のもとに何らかの話が来たらしい。

はつきりと決まったわけではないが、おそらく一度ふたりの相性を見て前向きに検討しようという感じなのだろう。王城に遊びに来るようにと、ツイーラに誘いがあったのだ。

これは未来視にはなかった流れだ。

夢の中のツイーラがナハルドと出会ったのは、大人になってからだった。

先日のパーティーでツイーラが東屋（東まや）に行ったのは、ライツェルトを避けたためだ。夢を見ていなければあの女の子の輪の中に加わって、ナハルドと知り合えなかったのだろう。

この時点でもう未来は変わり始めている。

だったからこそ、ナハルドを変えることだってできるはず。

ツイーラは明るいレモン色のドレスを着て、アマリーエと共に再び王城を訪れた。

先日は庭でのパーティーだったが、今日は王城の中に入れるらしい。兵士に守られたアーチ状の門を潜ると、そこはシャンデリアが吊り下げられた広いホールだった。しかし閑散としているわけではなく、メイドや文官たちが忙しそうに行きかっている。城の東棟がプライベートな空間になっているらしく、ツイーラたちはそちらへ案内された。

ぴかぴかに磨かれた廊下を歩いて応接室へと入る。椅子に座ると、すぐさまメイドがお茶を運んできた。

少し待っていると、銀系の刺繍が贅沢にあしらわれたドレスを着た、美しい女性が現れる。おそらく彼女が王妃なのだろう。顔立ちがナハルドによく似ている。アマリーエが礼をするのを見て、ツイーラも慌ててそれに倣った。

彼女が続いて入室したのはナハルドだった。伏し目がちに歩く姿は美しい人形のような。一瞬だけ目が合うが、彼の瞳はすぐさま別の場所へと逸らされる。

「ようこそいらしてくださいました。オラクル伯爵夫人、ツイーラ嬢」

王妃の声は鈴を転がすように柔らかで、それでいてはつきりとした威厳を持っていた。

「お目にかかれて光栄でございます、王妃殿下、ナハルド様」

アマリーエが再び深く頭を下げる。ツイーラもそのあとを追うように礼をした。

「本日はこうしてお目にかかれたこと、大変嬉しく思います。ツイーラ嬢、先日はナハルドと仲良くしてくださったのだとか。ナハルドはとても人見知りで友人もいないので、これからも仲良くしてくださいと嬉しいわ」

そう声をかけられて、ツイーラは顔を上げた。王妃の微笑は優しく、けれど視線の奥には見定めのような光が宿っている。

「も、もったいないお言葉にございます……」

ツイーラの返事に満足したように微笑んだあと、王妃はナハルドへと視線を移す。

「ナハルド、こんな場所で話なんて退屈でしょう。ツイーラ嬢を中庭にご案内して差し上げては？」緊張しているツイーラに気づいたのだろう、王妃がナハルドに提案した。

彼は小さくうなずくと、ツイーラをエスコートして部屋を出る。

中庭はすぐ近くにあった。暖かな陽光が降り注ぎ、まだ若い葉をつけた木々が風に揺れて柔らかな音を立てている。王城は多くの人が行きかっていたが、ここには人がいなくて静かだった。

花壇の前に置かれた石造りのベンチに案内され、ふたりで並んで腰かける。

すぐ近くにあるナハルドの横顔はかく、白群の瞳は愁いを帯びている。重たい沈黙が続いたあと、彼はゆっくりと唇を動かした。

「……ごめんね」

開口一番に謝罪されて、ツイーラはきよとした。謝られる心当たりがない。

「君のことを、母上に話してしまったんだ。そうしたら婚約者にどうかって」

なるほど。どうやら彼は自分のせいで婚約話が浮上したと思っているらしい。

「いいえ、それは私のせいですよ。私がナハルド様におかしなことを言ってしまったから」婚約しようと提案したのはツイーラが先だ。彼が謝罪することではない。

「でも君は、僕のことを知らなかったんでしょ？」

「それは——」

「僕の名前を知った途端、君の態度が変わった」

ツイーラはパーティーの日のことを思い出した。

たしかにあのときのツイーラは黒髪の少年がナハルドだと知って、しまったと思ったのだ。顔に出さないように注意していたが、彼はツイーラの気持ちを見抜いていたのだろう。

「……ごめんなさい」

「いいよ、そういうのは慣れてるし。謝るべきなのは僕の方なんだ。友達ができたかもって……勘違いして、君のことを話してしまった。君にとつては迷惑だったろうに」

ナハルドはじつと中庭の土を見つめながら言葉を紡ぐ。

彼の言葉を聞いて、ツイーラはあの日の自分の態度を反省した。先入観を持つなどアマーリエに言われていたのに、彼を拒絶して傷つけてしまった。

「勘違いじゃない！……です。私、本当に友達になりたいって思ってた……でも、殿下だって知らなくて、すぐく動揺してしまってた」

ダメだ、何を言っても言い訳になってしまう。だけど、ナハルドに殺される未来を見たからだなんて言えるはずもない。

「無理じゃなくていいよ。闇の精霊の祝福を受けた人間なんて、気持ち悪いでしょ？」

「それは違います！」

今度はきつぱりと否定できた。

ツイーラが恐れているのは、闇の精霊なんかじゃない。

「私は闇の精霊のことをそんなに怖いと思っていません。それに、祝福は選べないって知っていますから」

祝福は本人が望むかどうかに関係なく、精霊から一方的に与えられるものだ。

ツイーラだって、祝福を受けるまで時の精霊のことをよく知らなかった。

ナハルドが祝福を受けたという、闇の精霊に対して偏見がないわけではない。

よくない精霊、怖い精霊だという話は聞いているし、物語でもいつも悪役として登場するので、悪い印象があった。けれども、だからといって祝福されている者を怖いと思うかは別である。

未来のツイーラは、ナハルドのことを苦手に思っていた。でもそれは、ナハルドの瞳が怖かったからだ。何を考えているかまったく読めない虚無の瞳は闇そのもののようで、ああ、これは闇の精霊の寵愛を受けているからなのかと思ったのだ。

だけど、今のナハルドの瞳は怖くない。

ツイーラの態度で傷つき揺れている、普通の子供のものだ。

「ナハルド様は怖くありません」

にこりと笑ってみせると、ナハルドの目が地面から持ち上がりツイーラを捉えた。

視線がぶつかった途端、ナハルドの頬が朱色に染まり、彼は慌てた様子で唇を開く。

「そっ、そんなの、僕のことを知らないから言えるんだ。闇の精霊の力を、知らないから」

「髪の色が変わる以外に、何かあるんですか？」

「……試してみる？」

ナハルドはそう言うと、悲しそうな顔をしてツイーラの頬に手を伸ばした。

彼に触れられた瞬間、ドクンと大きく心臓が鳴る。

それと同時に、まるで夢の中にいるようなふわふわした気持ちになった。

（あれ？ ナハルド殿下って、こんなに素敵だったわけ……）

なんだか突然、ナハルドのことが魅力的に見えてきた。

彼が好きだ。彼に好かれたい。この人に悲しい顔をさせたくない。

ナハルドの言うことなら何でも叶えてやりたいという気持ちになったところで、パンツと手を叩く音がして、思考がクリアになった。

ツィーラは驚いて、再びナハルドの顔を見る。美しい顔だが、先ほどのような強烈な魅力は感じない。えも言われぬ恐怖を感じて、じわりと汗が滲んだ。

「……い、今の……なに？」

「闇の精霊の力だよ。君が僕を好きになるように、精神を支配したんだ」

それはたしかに恐ろしい力だと思った。心が自分のものではなくなるという体験は、最悪といつていくらいに不快だった。

闇の精霊が嫌われているのは、祝福した相手に、こんな力を与えるからというものもあるのだろう。

「だ、誰にでもこんなことができるんですか？」

「複数人を同時に操ることはできないし、限界もあるけどね。僕を好きにさせるだけじゃなく、誰かを怖がらせることも、もしかしたら自殺させることだってできるかもしれない」

「……それは、たしかに恐ろしい力ですね」

ツィーラは未来のナハルドを思い出した。ツィーラとライツェルトを殺して、どうやってルミ

エナの心を得るつもりだったのだろうかと思っていたが、彼には他人の心を変える力があつたのだ。

その気になれば相手の心を支配できるのだから、ルミエナを得ることも可能だ。

正直言つて、ナハルドが恐ろしかった。

ツィーラの手が震えているのを、ナハルドは見逃さなかったようだ。

「僕が嫌われる理由が分かったでしょ？」

ナハルドは自嘲して、そつとツィーラと距離を取った。そうするのが当たり前だというように、悲しそうな顔をしてツィーラから離れたのだ。

何もかもを諦めたようなその表情がすごく苦しく見えて、ツィーラは咄嗟にナハルドの腕を掴んで自分の方へと引き寄せた。

そのままナハルドを抱きしめると、彼はビクツと身体を固くした。

「ツ、ツィーラ？ な、何するの!？」

「いきなりごめんなさい！ でも、なんだか、すごく悲しくて」

ツィーラが怖い未来を見たとき、アマーリエが優しく抱きしめて慰めてくれた。

それと同じように、大丈夫だという気持ちを彼に伝えたくなったのだ。

「……大丈夫ですよ。だって、ナハルド様はそんな力があることをわざわざ私に伝えてくださったんですから。誰かの気持ちを無視して力を使ったりしないって信じられます」

ナハルドの力は怖かったが、それよりも未来視で剣を向けられたときの方がずっと怖かった。

あのときのナハルドは、ツィーラを殺すことをなんとも思っていないかった。だけど今のナハルド

は、ツイーラを怖がらせて遠ざけるために力を使ったのだ。

きつと、期待しないように。仲良くなってから、裏切られないように。

当たり前のようにそう行動するナハルドは、今までどれだけ傷ついてきたのだろうか。

何も感情を映さない、虚無の瞳をした未来のナハルド。彼がああなるまでに、いったいどれだけのつらい経験をしてきたのだろう。

「ツイーラ……やめて、離して……僕を、期待させないで……」

離してと言いながら、ナハルドは抵抗する素振りを見せない。

本当は彼も期待したいのだろう。だから、ツイーラを突き放さない。

「……本当はツイーラも怖いんですよ。だって、手が震えてる」

「怖い……ですよ。でも、ナハルド様と友達になりたいって思います」

完全に恐怖が消えることはないだろう。ナハルドの力も、彼に殺されるかもしれないという未来も怖い。

だけど、ツイーラはナハルドと向き合うと決めたのだ。彼の味方になるのだと。

それに、たぶんきつと、彼は怖いだけの人じゃない。

「……僕と、友達になってくれるの？」

「ナハルド様が望んでくれるなら。また、綺麗な虫とかお花の名前とかを教えてください」

ツイーラが頼むと、返事の代わりに彼の腕が背中に回った。

ツイーラとナハルドが友人関係になってから、半年が経過した。

ツイーラはナハルドと文通しながら、ときおり王城に遊びに行くという生活を続けている。

ナハルドとの友情は順調だ。本が好きだというナハルドは、ツイーラの知らない知識を色々と教えてくれるので、話をしている面白。

ふたりが交流を深めるのを見て大丈夫だと判断されたのか、正式に婚約を結ぶことに決まった。

ツイーラはそれを素直に受け入れた。ナハルドから逃げるのではなく、向き合おうと決めたからだ。

「ツイーラは本当によかったの？ その、僕と婚約することになって」

ナハルドとの婚約が決まった翌週、いつものように王城にある彼の部屋に遊びに行くと、ナハルドは不安そうにツイーラに問いかけてきた。

「もちろん！ ナハルドと婚約できるのは嬉しいよ」

ツイーラが笑うと、ナハルドはホッと息を吐き出した。

ナハルドが王子だと知ってから、しばらくツイーラは敬語で話していたが、彼の希望で気安い言葉を使うようになった。様をつけるのではなく、家族のように気安く接してほしいと頼まれたのだ。ナハルドに何かを頼まれることは珍しかったので、ツイーラは喜んでその提案を受け入れた。無礼にならないか心配だったが、婚約者という間柄なら問題ないだろう。

「ナハルドこそ嫌じゃないの？ 私が婚約者になるの」

「嫌なわけないよ！ 君と結婚できるなら、嬉しいし……」

ナハルドは顔を赤らめてもじもじとする。

喜んでもらえるのはありがたいが、ナハルドと結婚となるとどうしても不安が頭を過る。

未来のナハルドは、ライツェルトと結婚したルミエナに横恋慕をしていた。何にも興味を持たないように見えたナハルドが執着したくらいだから、よほど惹かれるものがあつたのだろう。

(もしかしたら今のナハルドも、ルミエナに恋をするのかもしれない)

「ねえ、ナハルド。もしこれから先、他に好きな人ができたらいつでも言つてね。私はいつだってナハルドを応援したいし、そのために婚約を解消する覚悟もあるから」

「……どうしてそんなことを言うの？」

ナハルドの表情がすつと凍る。白群の瞳が陰った気がして、ツイーラは慌てた。

「ナハルドが嫌なわけじゃないよ？　ただ、私たちはまだ幼いし、大人になったら他に好きな人ができるかもしれないでしょ？」

「僕が好きになるのはツイーラだけだよ。ツイーラは違うの？　他の誰かを好きになる？」

ナハルドは間髪容れずにツイーラの言葉を否定した。

一途に慕ってくれるのはありがたいが、それは刷り込みのようなものだと思っている。初めてできた友達だから執着しているだけで、もつと交流が増えれば他に興味が向くようになるだろう。

「今はそうでも、未来のことは分からないでしょ？　だから、もし他にそういう相手ができたら教えてほしいっていただけどよ」

「何年経つても変わらないと思うけど……分かったよ。でも、代わりにツイーラもそういう相手が

できたら真つ先に教えてね。絶対に」

「う、うん、分かったよ。約束する」

やけに強く言われて、ツイーラは戸惑いつつも頷く。

そのとき、遠慮がちに部屋のドアがノックされた。

「ナハルド様、お茶をお持ちしました」

「……ありがとう、入っていいよ」

ナハルドが許可を出すと、緊張した面持ちのメイドが入室してくる。

彼女は堅い表情でテーブルにカップと菓子を置くと、一秒でも早く部屋を出たいとばかりにすぐさま扉に向かった。「失礼しました」と短く退出の挨拶を告げると、逃げるように部屋を出ていく。

ナハルドに接する使用人は、いつだってこんな様子だ。

「ねえ、担当のメイドを代えてもらった方がいいんじゃないの？」

いくらなんでも、あの態度はいかがなものか。

思わずツイーラが零すと、ナハルドは首を左右に振った。

「仕方がないよ。彼女だって、僕を担当したいわけじゃないだろうから」

「でも……」

「それに、使用人に怯えられるのは僕のせいなんだ」

ナハルドはまだ、闇の精霊の祝福を上手く制御できていない。感情が高ぶると力が暴走して、近くにいる人間を無意識に洗脳してしまうのだとか。そのせいで過去に、使用人を大変な目に遭わせ

たことがあるらしい。

その事件がきっかけで、ナハルドは腫れ物に触るような扱いをされているのだ。

「闇の精霊の力はまだ制御できていないんだ。同じことが起きない保証なんてないのに、怯えるなんて言えないよ」

たしかに、いつ力が暴走してしまうか分からないのは扱いに困るだろう。

心を支配されたことを思い出す。精神を塗りつぶされるようなあの感覚は、本当に恐ろしかった。練習とかできないのかな。そういう力って」

ツイーラも協力できればいいのだが、時の精霊の力は意識して使えるものではないらしい。彼と違って精霊の影響を感じることもないし、あの日以来、別の未来を見ることもなかった。ナハルドの役には立てないだろう。

「制御するコツはあると思う。……ライツェルト殿下ができているから」

ライツェルトの話題を出すとき、ナハルドの表情は複雑なものになる。

兄であり、光の精霊の祝福を受けているライツェルト。同じように強い力を持っているにもかかわらず、素晴らしいと人々に受け入れられて、彼の周囲にはいつも人が集まっている。ライツェルトが悪いわけではないが、ナハルドからすれば思うところがあつて当然だろう。

「ナハルドは、ライツェルト殿下のことを兄様とは呼ばないの？」

ナハルドはずっと彼を他人のように「ライツェルト殿下」と呼んでいる。

兄弟間の交流も少ないらしく、ナハルドとライツェルトが会話しているところを見たことがな

かった。

「……嫌っているわけじゃないけど、僕と違いすぎるから。どうにも家族だと思えなくて」

「兄弟で一緒に何かしたりしないの？」

「昔は一緒に勉強していたんだ。でも、僕が精霊に祝福されてから、陛下やライツェルト殿下にはあまり関わるなつて言われて」

「……そう」

ひどい話だと思うが、そう判断を下した者を責めることもできなかった。

王や王太子は国の重要人物だ。万が一にも、何者かに操られることなどあつてはいけない。

ナハルドが自分の意思で力を制御できないのなら、なおさらだろう。

「光の精霊も、闇の精霊と似たような力を持っているのに。理不尽だとは思ふよ」

「光の精霊の力も人の心を操るの？」

「心じゃないけど、光の精霊の力は相手の行動を支配することができるんだ」

闇の精霊は相手の心を塗りつぶすが、光の精霊は相手の身体の支配を奪う。対になる精霊だけあつて、その力はたしかに似通っている。

「似たような力なのに、光の精霊は崇められているのよね」

「建国時に王に協力していたという話があるし、相手の精神を奪うよりも身体を奪う方が、まだ健全だと思われるのかもね。あと、光の精霊の力の方が制御しやすいものもあるかも」

光の精霊の力が暴走することはあまりないのとか。

同じように祝福を受けても、ライツェルトの髪色は変わったりはしなかったらしい。

「ライツェルト殿下なら、力を制御するコツとかが分かるのかな」

相談したりはしないのだろうか。接触を止められているのだとしても、手紙か何かでやり取りすることならできると思うのだが。

「あの人なら何か知っているかもしれないけど、今さら聞けないよ」

ナハルドは四歳のときに祝福を受けた。それ以降、ずっとライツェルトとは話していないらしい。もともと特に仲がよかったわけでもないこともあって、どう接すればいいか分からないようだ。

彼が会話する家族は母くらいで、同じ城で暮らしているというのに、父と兄とは疎遠だという。

その母に対しても、厳格な性格のため甘えることなどはできないのだとか。

ツィーラが口を挟むことではないかもしれないが、寂しいと思った。

ツィーラの家族は仲がいい。母は優しいし、仕事で忙しい父とはあまり会話できないけれど、遠くに出かけたときは必ず土産を買って帰ってきてくれる。兄とは喧嘩するものの、それなりに良好な関係だと思う。

ナハルドにだって、甘えられる家族が必要だ。

きつと孤独をこじらせてしまったから、未来で暴走することになるのではないか。

「私、ナハルドの代わりにライツェルト殿下に聞いてみるよ」

直接話したことはないが、ライツェルト殿下は優しい人だと聞いた。弟が困っているのだと知れば、手を差し伸べてくれるだろう。

「ツィーラ？」

「ナハルドが会っちゃダメって言われてるなら、代わりに私が動くから。力のこと、お兄さんに相談してみよう？」

「必要ないよ。迷惑だって思われるかもしれないし」

「噂で聞いた感じだと、そういうことは言わなそうだけど」

「それは……そうかもしれないけど」

ツィーラの言葉が正しいと思っただのか、ナハルドは押し黙る。

おそらくツィーラのようなように、彼は拒絶されることを恐れているのだと感じた。

誰かが強引に手を引っ張らなければ、きつと動けないのだろう。

尻込みするナハルドを押し切って、ツィーラはライツェルトに面会を申し込んだ。

忙しいだろうと思っていたのだけれど、意外にあっさりと面会の許可が下りて、ライツェルトに会えることが決まる。

指定された部屋に向かうと、すでにライツェルトが待っていた。直前まで何かの書き物をしていたようで、執務机の上にはいくつかの紙束とペンが置かれている。

「ライツェルト殿下、面会に応じてくださりありがとうございます」

「気にするな。君はナハルドの婚約者に決まったのだろうか？ 一度、話してみなかったんだ」

ライツェルトはふわりと微笑んだ。まっすぐツィーラを射貫く目には自信が満ちているように見

える。喋る声にも明るさと力強さがあり、聞いていて心地よい。

ナハルドとはずいぶん雰囲気が違うと、ツイーラは思った。

「以前のパーティでは、挨拶だけしてどこかに行っていたな」

「覚えていらっしゃるのですか？」

城でのパーティのことを持ち出されて、ツイーラは驚いた。

ほんのひと言挨拶しただけの人間を覚えてるなんて、信じがたいことだ。

「君が愛らしかったから。……と言えればいいが、教育の賜物だ。挨拶を受けた人間の顔は覚えなさいと教師がうるさいんだ」

冗談を交えて軽快に話す。なるほど、これは人に好かれるはずだとツイーラは感心した。

「ナハルドと仲良くしてくれているらしいな。母が喜んでいたよ。俺からも礼を言わせてくれ。ナハルドの面倒を見てくれてありがとう」

「面倒を見ているつもりはありません。ナハルド様は素敵な友人ですから」

「友人か。婚約者ではなく？」

「婚約者ですけど……まだ友人という感覚の方が強くて」

「まあ、俺たちの歳ならそんなものか。でも、よかった。ナハルドに君みたいな友人ができて」
ライツェルトの口ぶりは、まぎれもなく弟を思う兄のものだった。

ナハルドは彼を遠い人と感じているようだが、ライツェルトはそうではないのかもしれない。

「今日面会をお願いしたのは、ナハルド様に祝福の力を制御する方法を教えていただけないかと

思ったからなんです」

ツイーラが用件を切り出すと、ライツェルトは表情を曇らせた。

「それは……難しいかもしれない。俺もできるなら、あいつに何かしてやりたいけど」

「会うことを止められているからですか？」

ナハルドと同じように、ライツェルトにも接触するなという申し出があったのだろうか。

ツイーラはそう思ったが、意外なことにライツェルトは首を左右に振った。

「いや、たしかに祝福を受けた直後はそう言われたが、それはもう意味がないんだ」

「もう意味がない？」

「俺は光の精霊の力を制御できるようになっている。ナハルドが俺に力を使おうとしても、その力と反発して成功しないらしい」

「え？」

「光の精霊は、闇の精霊と同等の強い力を持っているんだ。他の精霊ならば闇の精霊に負けてしま
うが、光の精霊の祝福を受けている俺には、あいつの力は通用しない」

つまり、ライツェルトであれば、ナハルドに操られる心配はないらしい。

「なら、どうしてナハルド様にお会いにならないのですか？」

「その方がいいと思ったんだ。ナハルドは俺を嫌っているだろうから」

ライツェルトの表情が悲しそうに陰る。

「そんなことはないと思いますが……」

たしかに、ナハルドはライツェルトに対して複雑な気持ちを抱いているようだった。けれど、嫌ってはいないとナハルド自身がそう言っていたのだ。

「あいつは俺を他人のように、殿下と呼ぶだろう？ 兄だと思っていないのが明白だ」
なるほど。彼はナハルドからの他人行儀な呼び方を気にしているのだ。

「ナハルド様から嫌われるのが辛いのであれば、どうしてもっと関わろうとしなかったのですか。彼が辛いときに助けてあげられるのは、ライツェルト様だったのでは？」

「……俺が傍にいれば、あいつの負の感情を刺激するだけだと言われたんだ」
ライツェルトは悔しそうに強く拳を握る。

たしかにそういう一面もあるだろう。あらゆる面で優秀なライツェルトが近くにいると、嫉妬したり悔しくなったりしそうだ。

「でも、ナハルド様はきつと誤解しています。闇の精霊の祝福のせいで、家族にも嫌われてしまったのだと」

「俺はあいつを嫌いになつてなどいない！」

「なら、それをナハルド様に直接伝えてあげてください」

「それは……だが、今さらどんな顔であいつと関われというんだ……」

ライツェルトは困ったように眉尻を下げる。

その様子は、今さらライツェルトに頼れないと困惑していたナハルドそっくりで、ツイーラは思わず笑ってしまった。

「おい、なぜここで笑う」

「も、申し訳ありません。……でも、今のライツェルト様が、ナハルド様によく似ていると思つて」

「俺がナハルドに似ている？」

「ナハルド様も似たようなことをおっしゃっていたんですよ。今さらライツェルト様を頼れないと」

「あいつが、そんなことを……」

「ナハルド様はライツェルト様を嫌っていません。きつと、同じお気持ちですよ」

ライツェルトは一瞬、期待するような顔をして、それから気まずそうに頬を掻いた。

「ナハルドと似ていると言われたのは初めてだ」

たしかにふたりは一見すると似ていない。どちらも綺麗な顔立ちだが、ライツェルトは男らしく精悍で、ナハルドはどちらかといえば中性的で繊細だ。今は髪の色も異なるから、なおさら兄弟には見えないだろう。

でも、相手に拒絶されるのが怖くて一步を踏み出せずにいる様はとてもよく似ている。

「ナハルドは俺を嫌がらないだろうか」

「初めは戸惑われると思います。でも、なんとか歩み寄っていただけないでしょうか？ ライツェルト様はお兄様なのですから」

「……そうだな。私の方が兄なのだから、頑張らなくてはいけないな」

「そうです。上の兄弟というのは、わがママを言われるものなのです」
ツイーラがふざけて言うのと、ライツェルトの唇が綻んだ。

「そういえば、君も妹であつたな。兄妹仲は良好か？」

「うちの兄は酷いのですよ？ 私の分のお菓子を食べてしまうのです」

「なるほど、それは酷いな。そういうときはどうするんだ？」

「怒って、新しいお菓子を買いに行ってもらいます」

ツイーラが語る兄弟喧嘩の様子を、ライツェルトは微笑ましそうに聞いている。

「いいな。……俺とナハルドもそんな風になれるだろうか」

「ライツェルト様が望まれるなら、きつと」

ツイーラが励ますと、彼は覚悟を決めたような顔で頷いた。

それから数日後。ツイーラがナハルドの部屋に遊びに来てしばらくすると、コンコンと扉がノックされる音が聞こえた。

「ナハルド、ライツェルトだ。入ってもいいか？」

どうやら、ライツェルトはナハルドと関わることに決めたらしい。

訪問者の名乗りを聞いて、ナハルドはビクツと身を固くした。明らかに動揺した様子で救いを求めるようにツイーラを見る。

ツイーラは笑顔を作つて頷き、彼を励ました。

「は、入って……」

ナハルドの声は小さく微かに震えていて、ひどく緊張しているのだと分かる。

けれど、その声はきちんとライツェルトに届いたようだ。少しして扉が開き、ライツェルトが部屋の中へと入ってくる。

「久しぶりだな、ナハルド」

ライツェルトが浮かべた笑みも、少しだけこちなく見える。

「な、何しに來たの……」

突き放すような物言いに、ナハルドがしまったというように顔を顰める。

ツイーラはライツェルトが怒って帰らないかハラハラしたが、彼は笑顔を崩すことなくナハルドへと近づいていく。

「ツイーラから、お前が力の制御が上手くできずに困っているのだと聞いた。よかつたら、俺と一緒に訓練してみないか？」

ライツェルトがナハルドに向かって、手を差し出した。

その手を見つめながら、ナハルドは不安そうに瞳を揺らす。

「む、無理する必要はないよ。ライツェルト殿下は王太子なんだから、僕なんかと関わっちゃダメでしょ？」

「無理などではない。お前の力になりたいんだ。……ダメか？」

ナハルドは迷うように視線をさまよわせるが、それでもまだライツェルトの手は取らなかった。